



講話とくろく (四)

千葉 高島生

啄木の歌

石川啄木の歌に「何んとなく今年はいいことある如し、元日の朝晴れて風なし」とあります。元日の朝、空に一片の雲もなく日本晴れて風亦穏な氣持のよい新年を迎へると誰でも「何となく今年はいいこと」に巡り會ふ様な氣持になるもので、流石に啄木はその實感を三十一文字に収めて出たものであります。さて本年の元旦は如何に？前日の荒天も一夜明ければ名残なく晴れて日本晴れの、まことに和やかな元旦でありました。私はこの佳き元旦を迎へて幸福感に満たされ、啄木の歌を思ひ出して、今年も何事か有るんだと、希望を持つことが出来ました。皆さん！絲價の前途は有望です。蠶も豊作である事は疑ひません。どうぞシツカリやつて下さい。最後に又一つ啄木の歌を引合に出して皆さんの御反省を願ひ度いことがあります。「いつしかに正月を過ぎて我が生活、また元の道にはまり来たれり」この歌は色々の意味に取る事が出来ませうけれど、私は「今年こそ斯くの方針でやつて行こうと、健氣な決心で迎へた新しい年も、いつの間にか正月が過ぎて、また元の黙阿彌に返つて了つた」と云ふ、誰でも経験する私共の弱點を歌つたものと解釋して居ます。皆さんは何となくよいことありさうな新年を迎へ只今まで申上げた諸般の注意に従つて、今年こそ儲かる養蠶をしようと思氣込んで居られますが、その意氣込、その覺悟を、正月の過ぎると共に、また此の道にはまらぬ様、吳々も御注意有らん事を切望して私の本日の講話を終る事に致します。

ホルムスの句

米國の詩人ホルムスの句に、「新しいものを試みる最初の人となる勿れ、併し古きものを捨てる最後の人となる勿れ」と云ふ意味のことが有りますが、大いに味ふべき言葉でありますか。奇抜な飼育法などを宣傳するものがある、直に飛び付く養蠶家があるが、その熱心は諒とすべき、賞すべき事ではありませぬ。條桑育、箱飼等の變遷をみれば、全くホルムスの言ふ通りその初期には幾多の犠牲がありました。さりとて今日尙明治時代の飼育形式に膠着するのは愚の

骨頂であります。ズルイ様だが、何事でも潮時を見る事が肝要で、それには公正の判断を誤らぬ様、見聞を廣くする事を心掛けねばなりません。

分離白

本年の晩秋蠶の作柄を見るに、品種關係に於ては、國蠶日一〇七×支一の一の所謂新品種が豊作で、分離白の掛かつたものが不作の傾向を認めます。或る養蠶實行組合に於ては、組合長の専斷に依つて分離白に決定した所、それが不作だつたので、組合員が四分五裂して統制が取れなくなり、組合が分離して箱が割ける様な結果になつたから、分離白だと苦笑して居る人があります。

小便の肥効

桑の根が肥料を吸収する部分はその先端の方でありますから、餘り根元に施肥するのは不合理であります。或る地方では、男の立小便は桑に効かないが、女の立小便はよく効くと申すやうであります。之はホルムスの關係などど六ヶ敷く考へる必要はありません。つまり男女に依つて放尿位置が異なるから、男の放尿は根元にかゝり、女の放尿は畦間にかゝるからだと解釋すべきであります。

蠶桑兩全

養蠶經營の方針は、作柄の安定と、繭質の向上と、生産費低下の三者の目標とすべきであります。この三者の綜合した結果が、桑園一反歩當りの收購量となつて表示されます。即ち桑の作り方と、蠶の飼ひ方との兩方が全きを得て、初めて反當り收購量が多くなるのであります。近頃政黨方面で提唱される兵農兩全と云ふ事が國家にとつて必要であるならば、桑蠶兩全は正に蠶家に取つての重要事でありませぬ。處が所謂桑干貫取らずで、良い桑を作るものは兎角蠶が腐れ易い。繭の生産費も高くなるのを免れませぬ昔平重盛は父清盛が朝廷に逆き奉つたのを諫めて「忠ナラムト欲スレバ孝ナラズ、孝ナラムト欲スレバ忠ナラズ、重盛ノ進退茲ニ谷レリ」と慟哭したと日本外史に書いてありますが、此山陽の筆法を借りて云へば「良い桑を作らんと欲すれば蠶腐り、作柄を安定せんと欲すれば生産費高まる、養蠶家の進退茲に谷まれり」と泣かざるを得ない事になります。併し養蠶家はたい泣いて止む譯には行かず、何んとかして此の矛盾を打開調和する方法を發見しなければなりません。果して桑蠶兩全の名案があるであらませうか。

懸賞 絹物愛用宣傳標語

東京丸ノ内 日本中央蠶絲會

一、募集の趣旨

蠶絲業は日本の重要な産業であり、且つ絹の特質若しくは其の高雅優美なる點を強調し所謂『絹の良さ』を簡明直截に大衆に訴へ之を強く印象付け絹に對する一般國民大衆の認識を深め更に進んで之を愛用せんとする經濟的若しくは嗜好的意慾を誘發するに足る宣傳標語を求む。

二、應募規約

- 一、應募の標語は未發表の創作たること
- 二、應募の原稿は返却せざること
- 三、當選標語の版權は本會の所有とする
- 四、當選標語も補正加筆することあるべきこと
- 五、應募者は官製ハガキに住所、氏名を明記し『應募原稿』と朱書『東京市麹町區有樂町一ノ七日本中央蠶絲會宣傳部』宛郵送のこと、但し葉書一枚一首たること
- 六、當選標語にして本規約に違反し若しくは不正ありしことを發見したる場合は當選の取消し又は賞金の返還を爲さしむること

三、賞金

- 一 等 一人 金 參拾圓也
- 二 等 三人 各金拾圓也宛
- 佳 作 一〇人 各絹製國旗一旒宛

四、選者

- 久米 正雄 氏
- 高倉 輝 氏
- 岡本 英太郎 氏

五、締切期日

昭和十二年三月二十八日(蠶絲祭日)

六、發表

蠶絲界報六月號(昭和十二年)

上田便り

南天町農道新設工事開始 縣道上田松本線市南天町裏上田橋直新設道路工事第一期鐵道線路迄は縣直營二月一日より着工、六日には地鎮祭を行つたが道路幅員十五米、延長八百米、總工費一萬八千四百八十八圓、延人員八百五十六人、五月十五日迄に竣工する。殘部踏切ガード以北即ち町に出で之を東に進み松尾町に至る部分は昭和十二年度施行の豫定である。

長村のスキー消防組 菅平スキー場を擁する小縣郡長村消防組では廣義消防の建前から避難者救助、捜索に一役買つて出るべくスキー消防組を組織二月五日午後二時から所轄上田警察署長以下の巡回を受けた。組員五十五名何れも一流スキーヤー許りで行進、消防器具操、想定に依る避難者救助等統制の見事に多數スキーヤーも唯々感歎した。

特別市交附金交付 上田市では兼ねて文部省に特別市(貧弱市)としての教育費増加交付金を申請中の處二月六日附を以て一萬四千四百圓交付が決定した。縣内都市としては他に岡谷市の六千五百圓が決定された。

春蘭園遊園地六十八錢 小縣郡蘭園業組合暨田支部總會は二月七日別所温泉玉屋旅館に開催されたが市上本年春蘭相場(信濃、上田、川西兩市相場の平均)豫想投票を行つた處白蘭一貫匁最高六圓八十八錢、平均六圓一十一錢、最低五圓廿三錢と決定、今年蘭相場の好調を見越してゐた。

浦里村へ助成金交付 農林省特別助成村となつてゐる小縣郡浦里村では十一年度より村内一般施設を開始し約九萬圓の費用(既未設費)を投じて來たが二月八日附を以て農林省から上小縣郡を通じて一萬六千圓の助成金交付の件を通知して來た。右の内直ちに交付されるものは十一年度事業に對する七千六百圓で殘額八千四百圓は十二年度事業に對して交付される事になつてゐる。因に十二年中に行はるべき事業中の主なるものは大體左の如くである。

一、村内に於ける農道及水路の改修を行ひ水田利用の萬全を期し收穫を多

くす。

二、村産業組合の共同作業場を新築事業擴充を計る。  
三、村内廿一農事實行組合の事務所及共同作業場を建設する。  
四、肥料自給の爲め各戸に堆肥舎を建設する。  
五、其他諸事業の完了を期し第二次更生計畫の完成を期する。

蘭市場の共同戦線 年百餘萬圓の蘭を生産する上小地方は數年來有力製絲の特約組合が設立され昨年のは此の特約組合取引及産業組合の共同出荷等總産額の六割を占められ蘭市場への出荷は四割弱と云ふ状態であつたが産蘭處理統制法の實施に伴つて有力製絲家は規約更改の爲め目下各部落の製絲實行組合で改組の手續中早くも猛烈な特約組合争奪戦が行はれ蘭市場は衰滅する外ない情勢となり同地方の信濃、上田、丸子、依田、田中大塚、川西、東北の八蘭市場は此程信濃蘭園業社に會合協議の結果上小蘭市場の特約組合を共同戦線に張つて製絲家の特約取引に對抗する事に決定二月十一日各方面に急告の宣傳ビラを配布した。尙北信蘭園業社同盟會にも近く臨時總會開催を要求し更に全縣下の蘭園業社に呼びかける事になつた。

上田の建國祭 上田市では二月十一日の建國記念の佳節を壽く建國祭を公園内招魂社に於て午前十一時十分より舉行、在郷軍人、男女青年、男女青年團、消防組、一般市民等約二千餘名参加して行ひ引續き市公會堂に於て除隊兵六十名の歸還歡迎會が行はれ全市は全く建國色に塗りつゞされた。

スキー正科教授 文部省では過般來スキーの發達普及に鑑み小學校操教授課目中にスキーを正科として採用する事に決定したので縣では全國に率先して降雪地の小學校で之を實施する事となりその準備に二月二十日から五日間菅平青年學校講習所の縣營スキー學校で學校教員約百名を集めスキー指導講習會を開催した。

上小蘭園業社が製絲經營 上小蘭生絲販賣委員會は二月廿三日小縣郡聯合事務所に開かれ、十三日上田蠶取所に於ける那養蠶業組合、上小蘭生絲販賣、組合製絲の代表者會議の席上決定を見た處の上小地方産蘭處理具體的實行方策たる「上小蘭生絲販賣購買組合聯合會」を設立して

行く事に滿場一致可決し、之に依つて即日上小蘭生絲販賣の定款を改正して上小蘭生絲販賣と改稱したが同販賣が地方産蘭處理機關として活動すべき範圍は左の如くである。地方産蘭額八十萬匁の五割四十分を處理しその處理工場は自己資金十一萬三千七百九十圓と總工費に對する農林省共同施設助成金七萬五千八百十三圓合計十八萬九千五百廿二圓五十錢を以て設置されるもので生産能力は二百餘生絲十四萬五千六百二十五匁の豫定である。製絲工場従業員は男女共一八名男工十二名で乾繭従業員は男女共一七名延人員九百名となり一口五百圓二百廿八匁拂込み自己資金額に對する生絲販賣歩合收入は六萬七千八百八十五圓(百斤百十匁)を得る目算である。又解散の如く傳へられた組合製絲は各自の製絲事業のみを新設工場内で行ひ専ら供蘭團體として活動すべく方針決定され、以上の事業は本年内實現すべく活動を開始した。

飛行場工事場より土器古銭等發掘 陸軍上田飛行場三万坪擴張工事中二月一日敷地南部畑地で約三尺五寸の深さにツルハシを打込んだ處石盤に衝突之をはざるや下から高さ一尺五寸直徑一尺五寸位の圓廻りの太い口の付いた土壺が表はれ更に同地二三百米の場所から千二百年以前の彌生式と目される土壺の類大少が傷みとなつて約百個分位、それに數百年前の支那錢「開元」約百枚が何れも深さ三尺乃至三尺五寸位の處から發掘され尙カワラケも數枚飛出して來たので翌日市役所へ報告に及んだ。考古學の大家柴崎助役の鑑定に依ると八百年前鎌倉時代の物と見られるが更に十五日には地下約五尺の個所より彌生式高き約一尺の壺一個と四寸位の酒壺一個を、又十七日には石摺臼、壺、手鍋様の物、木炭並に宋時代に輸入したと見られる照寧元寶、紹元豐通寶、紹聖元寶等の古錢を掘出した。之れにより往昔の千曲川は現在より北方に偏

し發掘場所附近は河原地でなく人間が相當住つてゐたものと豫想され今後も發掘するに從ひ出て來る模様である。

觀光土産品展 東京オリムピックを機に觀光信用の國際的進出を企圖してゐる縣ではオリムピック記念として際物土産品の製産獎勵を旨として二月廿四日より三日間上田商工會議所樓上で觀光土産品並に農産美術品共進會を開催したが出品種目は木竹工、漆工、金屬工、柶柳工藝品、布帛、和紙工藝品其他食料品、繪葉書等である。

縣産蘭處理狀況 縣蠶絲課の調査發表に依る十一年度本縣産蘭處理狀況は組合製絲供蘭二、五〇九、一七二匁、蘭市場個人販賣一、六〇三、五二五匁、特約取引供蘭一、一五〇、八六〇匁、蘭市場共同販賣一、四七二、四四匁、養蠶家自宅販賣四四七、四六二匁、製絲場持込販賣二九四、四三二匁、蘭市場以外共同販賣二九四、七九四匁、蠶種製造一四七、六四一匁、蘭園業及蘭賣業者の店舖販賣八五、六七六匁、委託製絲二一、八三三匁、乾繭保管一八、三七一匁、自宅製絲九八、一八匁、其他一八九九二匁、合計七、二二三、三三三匁

となり組合製絲供蘭が三四、七八%で第一位を占め個人市場販賣二二、二二%で第二位となり乾繭保管は僅か〇、二五%の小率を示してゐる。尙前年に比して總じて八%減なるも共同販賣は逆に増加を示した。

絹織物にも軍需景氣 上田市役所調査昭和十一年中の絹織物生産(自家用を除く)狀況は機台數五十五台、職工五十三人生産額合計七萬六千二百圓で内澤大市物羽二重六千七百廿一碼五千二百四十二圓、同生絹白絹八千七百五十二碼六千八百廿七圓、御召八千四百七十七碼、縮緬及綾千八百七十四反一万二千九百九十圓、羽二重及平絹六百廿二反三千七百七十二圓、絹及紗四十九反二百六十六圓、銘仙及節

着尺物五百七十四反三千四百卅圓、其他着尺物四百廿三反二千六百卅六圓、袴地百廿八反千三百卅九圓、小巾生絹及白絹一万二千五百九反三萬六千六百七十一圓、女物帶地片側八十五本二千三百三圓、其他二千九百五十八圓で全生産額の前年比は一萬圓の激増となつた。内容から見ると大中物羽二重及生絹白絹(計一万二千七十圓)の大部分は海陸軍需品として賣られてゐる關係から軍需品の一般用は却つて千五百圓の減少となつて居り先づは軍需景氣が相當に含まれてゐるのが何れはれ

上田驛活況 上田驛の昭和十一年中取扱狀況は左の如く何れも前年比増加せるは農村經濟好轉を物語ると見られる。(括弧内は前年比増)

△乗車六十九萬九千二百四十五人(増二萬二千三百五十九人) 降車六十二萬五千八百一十一人(増二萬三千八百八十八人) 收入廿六萬三千三百十六圓(増一萬八千九百八十六圓) △手小荷物發送五萬九千七百十五個(増千五百卅四個) 到着十一萬六千六百四十四個(増六千四百七十七個) △貨物發送二萬廿一噸五萬三千八百二十噸運賃七萬七千九百七十一圓 (貨物前年比は統計基準相違の爲め不明なるも増加の見込)

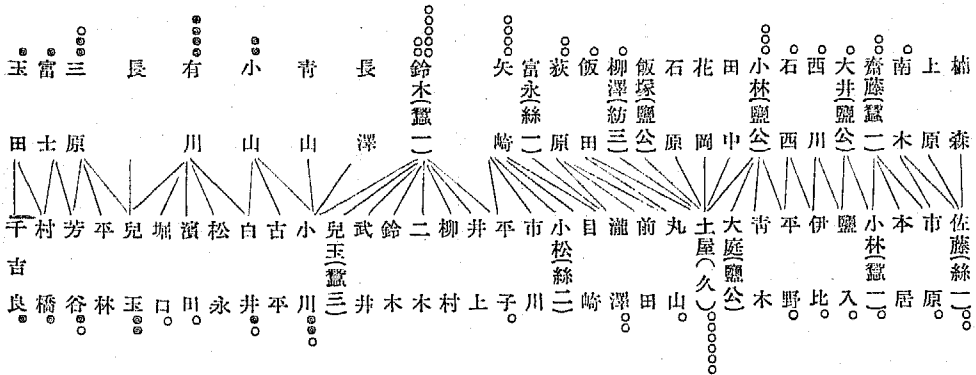
桑苗の購入増加 本縣蠶絲課調査に依る十一年度中に於ける縣下各郡市養蠶業組合の桑苗共同購入狀況を見ると總數四百二十五萬七千七百廿二本で前年に比し九十九萬本増加を示してゐるが右は昨年來の繭價高から養蠶家が活氣づき蠶種増産立て計畫を樹てゐる結果と見られてゐるが購入先及數量は左の如し。

△茨城一、〇八二、九二五本、△栃木一、〇二二、八二七本、△福島二、三九、〇〇〇本、△群馬一、五三三、〇〇〇本、△愛知二、五七、七三〇本、△新潟八、〇〇〇本、△山梨一、〇〇〇本、△東京一、四一、〇〇〇本

母校ニュース

文化講義 二月一日午後一時十分より午後四時迄三時間に亘り講堂に於て國民精神文化研究所員大串鬼代夫氏の『日本國民の覺悟』と題し文化講義があり全校生徒聴講した。

剣道稽古納會試合 二月四日午後四時より道場に於て恒例の如く本年春稽古の總決算とも云ふべき剣道納會試合を舉げた。校長、利田兩先生の御臨席の下に二週間の鍛練を示さんものと一同闘志に燃え最後迄熱戦を展開した。戦績左の如くである。



スキー講習會及大會

二月六日菅平スキー場て全校のスキー講習會を開いた。参加者は學生百八十二名、教師養成科生徒十五名、職員廿七名、傭人廿六名の計二百五十五名に達し全員ABCの三つのラシに分ちAは制動廻轉が出来る程度、Bは全制動が出来る程度Cは初心者としてAを六川忠一郎氏、Bを宮坂收氏、茅野功氏、平尾孝平氏、Cを廣川正治氏、鷹野誠一氏がコーチし日本ダボスに於て講習を行つた。午後五時大部分は下山した

が熱練者約百餘名滞在七日には山岳部年中行事の一つである校内スキー大會を開催した。左に當日の成績を掲げる。兩日とも天氣は快晴であつたが本年獨特の暖氣の爲めコンディションは良好と云へなかつた。

Table of ski competition results. Columns include category (e.g., 一キロ滑降), school names, and times. For example, 一等 糸一 宮田 一五米七〇, 二等 糸一 平野 一四米九〇, etc.

近縣中等學校柔道大會

母校柔道部主催の近縣中等學校柔道大會は十四校七十名の参加を得て二月七日午前十時から飯塚八段審判の下に母校道場に於て舉行戦績は左の如く地元上田中學に凱歌が響り午後二時終了引續いて昇段審査を開いた。

第一回戦 上田中學三 〇 丸子農商 〇 岩村田中 〇 長野師範 〇 松本一中三 〇 小縣蠶業 〇 上水内農二 〇 小松二中 〇 上野商業三 〇 小諸商業 〇 長野商業三 〇 小諸商業 〇 北佐久農三 〇 長野工業 〇

第二回戦 上田中學四 〇 上水内農 〇 北佐久農三 〇 上野商業 〇 長野商業三 〇 松本一中 〇 屋代中學(不戦勝) 準決勝戦 上田中學二 〇 北佐久農 〇 長野商業二 〇 屋代中學 〇

役員は二月九日附左の如く決定した。

役員は二月九日附左の如く決定した。會長 針塚長太郎、副會長 井上柳梧、總務部(部長)佐藤春太郎、(特別委員)窪田潤、小松忠一郎、茅野功、(委員)若林康弘(蠶三)、吉川啓人(蠶三)、小島武明(紡三)、長末方夫(蠶二)、井上正人(蠶二)、吉田耕三(紡二)

文藝部(部長)浦生俊興、(特別委員)鷹野誠一、湯原諒、蠶塚好作、(委員)岡田量雄、内藤康三(以上蠶三)、下平春巳、太田速雄(以上蠶三)、本多武、小林龍太(以上紡三)、森三郎(蠶二)、山岸琢次郎(蠶二)、石立輝久(紡二)

柔道部(部長)岡徳治郎、(委員)佐藤新三(蠶三)、濱田秀彌(蠶三)、福永雄三(紡三)、谷澤衛(蠶二)、多泉清(蠶二)、木村欽一(紡二) 庭球部(部長)倉澤美徳、(委員)伊比寛(蠶三)、外城和(蠶三)、永井干治(紡三)、長谷川政夫(蠶二)、南木喜一(紡二)、應取登(紡二) 弓道部(部長)内田浩、(委員)都筑正一(蠶三)、小松忠幸(蠶三)、齋藤生實(紡三)、太田光(蠶二)、宮田晴(紡二) 宮坂科員(紡二) 山岳部(部長)山口定次郎、(特別委員)宮坂收、小林尚一、(委員)阿形一三(蠶三)、小口宗久(蠶三)、野村英夫(紡三) 橋本正太郎(蠶二)、長澤四郎(紡二)、飯田武門(紡二) 辯論部(部長)金子英雄、(委員)島田博三、土屋久雄(蠶二)、富永恭一(紡二) 淺井清(紡二) 野球部(部長)野口新太郎、(委員)塚田典次(蠶三)、高田正氣(蠶三)、北崎喜義(紡三)、重田正喜(蠶二)、黒川重壽(紡二)、鶴岡要三(紡二)

競技部(部長)廣川正治、(委員)生天目久平(蠶三)、日幡映一(蠶三)、柳澤柳二(紡三)、鈴木彦彦(蠶二)、平子榮作(蠶二)、飯田省三(紡二)

卓球部(部長)荻原清治、(委員)中村繁(蠶三)、有賀正治(蠶三)、小林九十二(紡三)、齋藤重利(蠶二)、石西正美(紡二)、岡田信男(紡二) 蹴球部(部長)古谷榮藏、(委員)武田恒久(蠶三)、北澤泉(蠶三)、伊藤二男(紡三)、目崎武美(蠶二)、西井茂雄(紡二) 西谷剛一(紡二) 評議員 大瀧照太郎、遠藤保太郎、原田親雄、佐藤利一、谷林、貞三、阿形輝司、石倉新十郎、依田啓藏、和田圭計

職員(役員)移動は總務部長佐藤利一氏が評議員となり文藝部長佐藤春太郎氏が總務部長となり文藝部長の後任は浦生俊興氏が新任され總務部特別委員平尾孝平氏が辭されその後任には文藝部委員茅野功氏が廻りその後(蠶塚好作が新任された事である) 紡織科座談會 二月十日午前二時から會議室に於て紡織科職員、二三年生集合し就職座談會を開く。先づ三年生から就職線突破の体験を語り先生方より此れに對する批判又は注意があり二年生よりは質問等があつて四時頃散會した。

紀元節及建國祭 二月十一日午前九時半より講堂に於て全校紀元節拜賀式舉行午前十一時より招魂社に於て舉行されたる市主催の建國祭には學生代表五十名が廣川助教授、石井昭弘引率の下に校旗と共に参列した。 無試験檢定第一詮衡合格者決定 二月十三日午後一時十分より第一教室に於て無試験入學志願者詮衡教授會を開いた。志願者は養蠶科九名、製絲科一名、紡織科四名で審議の結果第一詮衡合格者として養蠶科七名、紡織科一名を許可したが右は体格検査の上正式に決定されるものである。

校友會役員決定 昭和十二年度校友會役員は二月九日附左の如く決定した。會長 針塚長太郎、副會長 井上柳梧、總務部(部長)佐藤春太郎、(特別委員)窪田潤、小松忠一郎、茅野功、(委員)若林康弘(蠶三)、吉川啓人(蠶三)、小島武明(紡三)、長末方夫(蠶二)、井上正人(蠶二)、吉田耕三(紡二) 文藝部(部長)浦生俊興、(特別委員)鷹野誠一、湯原諒、蠶塚好作、(委員)岡田量雄、内藤康三(以上蠶三)、下平春巳、太田速雄(以上蠶三)、本多武、小林龍太(以上紡三)、森三郎(蠶二)、山岸琢次郎(蠶二)、石立輝久(紡二) 柔道部(部長)岡徳治郎、(委員)佐藤新三(蠶三)、濱田秀彌(蠶三)、福永雄三(紡三)、谷澤衛(蠶二)、多泉清(蠶二)、木村欽一(紡二) 庭球部(部長)倉澤美徳、(委員)伊比寛(蠶三)、外城和(蠶三)、永井干治(紡三)、長谷川政夫(蠶二)、南木喜一(紡二)、應取登(紡二) 弓道部(部長)内田浩、(委員)都筑正一(蠶三)、小松忠幸(蠶三)、齋藤生實(紡三)、太田光(蠶二)、宮田晴(紡二) 宮坂科員(紡二) 山岳部(部長)山口定次郎、(特別委員)宮坂收、小林尚一、(委員)阿形一三(蠶三)、小口宗久(蠶三)、野村英夫(紡三) 橋本正太郎(蠶二)、長澤四郎(紡二)、飯田武門(紡二) 辯論部(部長)金子英雄、(委員)島田博三、土屋久雄(蠶二)、富永恭一(紡二) 淺井清(紡二) 野球部(部長)野口新太郎、(委員)塚田典次(蠶三)、高田正氣(蠶三)、北崎喜義(紡三)、重田正喜(蠶二)、黒川重壽(紡二)、鶴岡要三(紡二)





本會記事

本會日誌

二月十八日 勝木先生御逝去に付弔電を發す。
二月二十日 安東縣廣濟街の滿洲舞臺火災に付柁蠶絲檢査所在勤の各位に對し見舞電報を發す。
二月二十一日 勝木先生の葬儀執行せらる。本會より倉澤理事參列す。
二月二十六日 立教學院校友會より本會の組織及刊行物に付し照會あり。即時回答す。
三月一日 逋信省電氣局、長濱重磨氏よりの依頼により同窓會報第十五號贈呈す。
三月三日 新入會員歡迎會開催に付出席方通知す。

支會役員改選

神奈川千曲會に於て左記の通り役員改選せり。
支會長(新任) 水野健吉
副支會長(新任) 西山謙治
幹事(新任) 小林忠十郎
全 勝田清三郎
全 宮城忠雄
全 石井彦七
全 内山鶴雄

滿洲國安東市廣濟街柁蠶絲檢査所

千曲會よりの禮狀

拜啓 時下嚴寒の候益々御清祥之段奉賀候。陳者今同滿洲舞臺の大火災に當りては御鄭重なる御見舞の電報を賜り厚く御禮申上候。火災は意外に大きく一劃を燃え盡し死者六百五十三名に及び幸ひに類焼を免れ申候。檢査所も三日間屍體整理の中に有之申候。爾後各關係方面の努力により燒跡整理も着々と進行致し居り近く復舊致す事と存じ申候。先は千曲會員各位の御厚情に對し衷心より御禮申上候。
敬具
昭和十二年二月二十二日
安東柁蠶絲檢査所内
千曲會員一同

堤玄氏よりの通信

餘寒酷しき候益々御多祥の段奉慶賀候。陳者今同慶濟街の火災に關してはラサオ或は新聞にて御承知の事と存じ御懸念かとも存せられ候まゝ大略御報告申上候。本年に入り受檢數、檢査能力を遙かに超し處理困難と相成候爲人員増加を爲し三部制廿四時間運轉と滿洲最初の夜業を決定なし、舊正月も三日休みし丈にて十三日より檢査再開夜業を繼續中同日午後七時四十分檢査所を隔つ約三十間の所にある劇場滿洲舞臺より發火致し折柄の強風に快々に延焼致し候。小生夕食に歸宅中電話にて上兼君より報告に接し八時に歸付け時は火は既に道一重の隣まで延焼し來たり一時は檢査所も危険に陥り候。幸に逆風なりし爲め幸じて難は免れ候。益淵、小松、上兼、萩原、及び來安中の本間(弟)協力の上女子の避難及び萬一の場合を懸念致し所内萬全の策を構は候。十時に至り危険も去り一安心仕り候。十二時餘鐘の中を大部分引揚げ候。日本人女子全員十二時迄停止しは流石にと感心致し候。劇場は舊正月にて超滿員にて火の廻りが早かりしと天井墜落の爲め昨日に至り死体判明せるもの實に六百五十七名にのぼり候。腥慘目を蔽ふもの有之幼兒を抱きしめるの婦人等涙なくして見られざるもの候。昨日午後より遺族に引渡し居り候得共黒焦にて識別出來ざるもの本夕迄二百七十名有之、之れは合同葬の由に候。檢査所附近は非常線内にて道路にも死体を並べあり異臭漂ひ居り候。死体を固んでの遺族の號泣等悲惨の極に候。檢査は警戒裡に昨日より平常に復し申候。右大略御報告申上候。各先生にも一同無事なる旨御傳言被下度願上候。
(二月十五日校長宛)

兒玉信尊氏(蠶十五)より御寄附

客歲上高井蠶業學校より栃木縣立栃木農學校へ御榮轉せられし兒玉信尊氏より今回金拾圓也本會へ御寄付せらる。洵に奇特の至り不堪本紙上を以て感謝の意を表する次第なり。

會費領收

昭和十一年度分通常會費納入者
(〇印は蠶絲學雜誌代共)
〇安部 和(蠶三) 〇上杉慶次郎(蠶六)
〇戴元亨(蠶三) 〇三好彌次郎(蠶八)
〇土屋安治(蠶三) 〇高橋眞澄(幼七)
〇小林尚一(幼八)
昭和十一年度分通常會費納入者
土屋安治(蠶三)
金四圓也
終身會費完納者 林新一(蠶二)
昭和十二年度蠶絲學雜誌代
金壹圓也 比田井政治(蠶三)

早川先生記念品贈呈資金寄附者氏名

第七回
金參圓也 岩本市郎 田口敏夫
浦山藤吉 一志藏人 北澤茂
金貳圓也 湯澤重敏
樽谷三郎 上林多兵衛 山下政男
尾澤敏男 前澤康雄 山本岩三郎
伊藤力三 登坂忠吉 中島勝太郎
香山 護 稻生得三 小山俊吾
右合計金拾圓也
累計金六百九拾圓九拾錢也

清水先生記念品贈呈資金寄附者氏名

第三回
金參圓也 門田勇 山口貞周
宮本靜雄 三浦重雄 伊藤友次郎
井上一郎 江野村一雄 飯島貞雄
河西尚一 野間直之 藤松利八
金貳圓也 島倉惣次郎 末次房一
上田和男 三宅玉留
彼末武猪 宮崎弘
高橋利光
金壹圓五拾錢也
北村育稔 大塚重藏
金壹圓也 廣瀬廣 町田志敏
中野哲秀 北野三郎 田中齊
木下重政 矢島行雄 野口浩也
宮田清藏 吉野健吉 佐藤好一
古川義明 金子梓郎 馬場長市
藤居俊明 近藤清一郎 佐藤長保
佐藤義助 高野賢造 小川克巳
松浦彰義 永島覺 藤原克巳
松浦彰義 安川唯 池田寛之助
土屋 勉 中島 茂 田村三郎
小林良 丸 茂
右合計金八拾貳圓也
累計金壹百四拾六圓五拾錢也

叙任辭令

母校之部
二月一日
教授正六位勳六等 浦生俊興
敍從五位 野口新太郎
敍從七位
二月十五日
雇ヲ命ス、教務課勤務ヲ命ス
二月十九日
雇ヲ命ス、副手 坂口青三
雇ニ依り副手ヲ免ス
職員之部
蠶絲試驗場技師 敍四位 勝木喜重
兼任農林技師
敍高等官二等
蠶絲局勤務ヲ命ス
敍四位(以上二月十八日)

清水先生記念品贈呈資金募集

拜啓 時下愈々御清適之段奉賀候。諸御承知の如く清水先生は大正六年八月母校御就任以來實に十有八年の久敷に亘り或は母校教官として或は校友會部長として全力を傾けて御盡瘁下され母校のため貢獻せられしこと眞に大なるもの有之吾々會員一同平素感謝措かざる所に御座候。然るに先般御家庭の御都合により御郷里に近き名古屋市立工業指導所染織部長に御榮轉せられ既に新任地へ御赴任被遊候。就ては此の際先生の御功績を讃え且多年の勞に關しん爲め資金を募集し記念品を贈呈し聊か感謝の微意を捧げ度く候間左記要項御諒承相成御贊同の上御禮金被成下度此段御依頼勞々得貴意候。
敬具
昭和十二年一月

募集要項

一、融出金額 御隨意
一、申込期限 昭和十二年四月末日迄
一、送金先 上田蠶絲專門學校千曲會
便宜上千曲會の振替貯金口座(長野六二四三番)御利用相成度尚「清水先生記念品贈呈資金」なる旨御明記願上候。
千曲時報に掲載し受領證に代ふ。
一、受領證 千曲時報に掲載し受領證に代ふ。
一、記念品選定及贈呈方法は發起人に御一任相成度。
昭和十二年一月

發起人(五十音順)
飯島貞雄 井上一郎 伊藤友次郎
飯生俊興 河西尚一 藤原正巳
香山清和 北澤常雄 倉澤美徳
小松忠一郎 佐藤雄一 須田圭二
竹内善吾 田口博輔 野口新太郎
林貞三 濱田香三 平澤勝
松岡 濱田香三 平澤勝

卒業生之部
正六位 上野榮仁
敍從五位 從七位 中澤勝也
敍正七位(以上二月一日)
正七位 波多野千里
敍從六位(二月十五日)

御挨拶

拜啓 春寒料峭之候愈々御多祥之段奉賀候。陳者小生儀今回本校教務課に勤務致す事相成候に就ては今後何卒格別之御指導御鞭撻賜度奉懸願候。先は乍略儀以紙上御通知勞々御願迄如斯御座候。
敬具
昭和十二年三月
北村俊一
千曲會員各位

計報

恩師勝木先生を偲ぶ

蒲生俊興



去る二月十八日全養聯主催の蠶業講習會講師として招聘を受け、愛媛縣宇和島市に於ける講演を了り、海濱の料亭に招かれ、恰かも御巡視の途上にあられた

せられた。其後母校養蠶部長として、例の通り腕腕を奮はれたが、大正七年母校の騒動から休職となられ、中野の國立蠶業試験場囑託として轉せられた。爾來同場技師殊に生理部主任として才を頭腦を以て蠶絲科學の研究に日夜精勵せられた。その後間もなく家蠶外二、三絹絲蟲の染色體の研究を完成せられて農學博士の學位を授けられ、一躍遺傳及び細胞學の權威として盛名を馳するやうになられた。

憶へば先生の最も得意とせらるゝ所はミクロテクニクで、その鮮やかな腕前は洵に萬人の驚嘆に値する處であつた。又近年生物科學に對する御造詣を愈々深めらるゝにつれて、漸次鋭い觀察眼と批判力とが益々發達せられ、先生の部下や我々門下をして心膽を寒からしめたことも屢々であつた。

實に先生の晩年は専ら昆虫特に家蠶に於ける雌雄分體(ゲナンドロモルフ)の研究に没頭せられたが、其の動機は私が後部支場在勤時代(大正九年頃)先生と協同研究として觀察發表した家蠶の異常雌雄同體の研究に端を發し、その後熊本支場其他で選出された特殊の系統を材料として、恰かも、リマントリアの中性學說の權威たるゴールドシュミット先生の御來朝を機會に、愈々その研究を大成せられた。先生は名譽ある農學賞を今回は又去二月八日附にて理學博士の學位を再び受領せられたといふ、破格の榮譽を膺はれたことは、先生の恩顧に浴し且教導を蒙つた私共として此上もない喜悅とする所であつた。

然るに天何ぞ無情なる！吾等有志の主催する理博祝賀會席上に於て此の凶事の發生を見んとは、洵に國家的に、斯業上に又吾等の立場から見ても絶大なる損失であり、誠に残念至極である。今や幽明境を異にし再び先生の温容とあの澄瀾たる聲喉に接することは出来なないが、然し先生の遺された學界に於ける偉業は英靈と共に永遠に朽つることが無いのである。憶ふて茲に至れば轉た万感胸に逼りて筆を進むることが出来ないのである。噫！

勝木先生の御逝去を悼む

松村季美

昭和十二年二月十八日午前七時、我等の恩師勝木先生には腦溢血の爲め瀕焉として逝かる。悲しい哉。

其の前後在京我々同窓の有志が開いた先生の理學博士の學位を得られた祝賀會の席上に於て發病せられてより、僅か半日にして幽明境を異にせる不歸の客となられたのだ。宴會の日の夕方、御宅を出られる時、今夜は皆が自分を祝つて呉れるさうだから、十分客になつて歸りが遅くなるかも知れぬから、先に寝る様に御宅の方々に言はれたさうである。何んぞ知らん、夫が御家族の方々と御永別の言葉とならうとは。先生の御名譽を祝福し萬歳を祈つて開かれた會が變じて逝きて歸らぬ先生の送別會に終らうとは。平常人一倍健康の勝れさせられた様拜察して居た我々は此の突然の御逝去に接し、驚愕措く能はず、人生朝露の感を一入禁じ得ざるものである。

先生は明治四十二年東京帝國大學農學部を卒業せられてより、大學院に於て故石川博士及び外山博士指導の下に養蠶學の研究に従事せらるゝ傍、群馬縣富岡の高山社蠶業學校に教鞭を執られた。四十四年上田蠶絲專門學校の開校と共に選ばれて養蠶科の専任教授となり、開校當時教官少く設備不十分な學校に於て、授業に實驗實習に身を以て學生の指導に

當られた。翌四十五年養蠶學研究の爲め伊、佛、獨に留學を命ぜられ大正三年歸校せられた。留學中に主として獨逸ミューンヘン大學に於て世界の遺傳學者ゴールドシュミット氏の下に在つて、細胞學の研究を積まれ、其業績は一九一四年の獨逸の細胞學研究誌上に「アスカリスの生殖細胞の染色質の量的變異に關する研究」として發表せられて居る。歸校後は養蠶科學生に遺傳學の講義をせられ、養蠶に關する試験の指導に當らるゝと共に大正五年には農林省蠶業試験場の囑託を兼ねた。大正七年には上田の專門學校を辭されて、蠶業試験場囑託として専ら家蠶の細胞學的研究に従事せられた。

大正八年には絹絲蟲の細胞學的研究と題する論文によつて農學博士の學位を得られた。大正九年に蠶業試験場技師に任ぜられ、生理部主任としてX線の蠶に及ぼす影響、温湿度の蠶に及ぼす影響、天柢蠶の品種改良等の試験を進められたが、大正十三年より鋭意「遺傳的「ゲナンドロモルフ」及び體性「モザイク」の研究」に着手せられた。偶々先生會で「恩師ゴールドシュミット氏が農學部に講義に來朝中の折とて、先生の研究を進めらるゝ上便益が少なかつた事と思はれる。大正十五年には實験の進歩の爲め生理部主任を辭められた。専念研究に没頭せられた。斯くて此の興味ある研究業績は昭和二年より最初はゴールドシュミット及び先生の共著で、次では先生單獨の著として、獨逸の生物學年報及生物學中央雜誌上に矢張り早やに數度發表せらるゝに及び其の獨創的にして卓越せる業績に對し、世界の生物學界は賞讃の辭を惜しまざるに至ると共に、先生の此の研究が長くも天聽に達し、昭和三年には遺傳的「ゲナンドロモルフ」及び體性「モザイク」の研究業績と標本とを聖上陛下に献上するの光榮に浴された。昭和八年には本研究によりて農學賞授與の榮を得られ、十二年二月八日には本研究論文によりて理學博士の學位を受けられた。

先生は生物學者として非凡の能力を有せられたのみならず、事務家としても卓越せる才能を備へて居られた。即ち或は日本蠶絲學會の理事として、或は應用動物學會の編輯委員として、或は雜誌「キトロジー」の常任委員として、或は日本遺傳學會評議員として、會報の編輯に、講演會の執筆に先生獨特の手腕を振はれて會の發展に對し盡瘁せられた事は多大であつた。又公私多忙の身を以てして中野區の學務委員として困難なる事業たる努力を拂はれ、橋場桃園小學校の兒童後援會評議員として多年會務の刷新、兒童教育施設の改善に盡力せられた事など其の功績は枚擧に暇無き程である。

先生資性直情徑行、事を處するに明敏果斷、常に後進の誘導鞭撻の勞を惜まれません、其の指導に當つては極めて嚴格且懇切にして徹底的であつた。

座談に妙を得られ、對者をして時の移るを知らざらしめた。常に武士道精神を鼓吹せられ自ら柔道二段の技を有せられた。夙に深く刀劍を愛好せられ一廉の刀劍道であられた半面、書をよくせられ、漢籍に興味を持たれたことは、凜然冒し難き御風格の内に光風霽月の御性格の一面を窺ふ事が出来る。

先生は御家庭に在りては、此上なき温良にして親愛なる父君として、はつ子令夫人を始め、令息辰雄さん、令嬢よし子さん方から敬慕の的となつて居た。夫れだけに此度の御急逝による家族方の御愁傷、御落膽の程拜察に餘りある次第である。試験場に在りては優秀なる蠶業研究者として、生物界に對しては眞摯なる科學探求者として、後進に對しては懇切なる指導者として、家庭に在りては温厚なる慈父として先生の万歳を祈つて止まざるの秋、突如此御逝去に遇ふ。痛惜何ぞ堪へん。されば先生の研究業績は永へに不朽である。今後必ず第二、第三の後繼者を出づるあつて遺業を完成する事あるを確信する。先生の御遺陶を受けし我々後輩は不肖と雖も先生の御指示を指針として各々趨ふ所を過らざる報恩の万一をも致さん事を御誓ひする。

先生無き後の御家庭に於かれては淑徳高き令夫人の愛撫に浸り給ふ御二人の令息と令嬢には天晴れ御成人遊されて、父君の在世にも増して彌健かに金き圓樂に榮え給ふことを確く信じて疑はぬ。

在天の靈幸に安じ給はんことを。

奥津城に梅を手向けて涙あり。



勝木先生御靈前(二月十四日)

勝木先生の御臨終に侍つて

原田兵衛

勝木先生が今回芽出度理學博士の學位を得られた。其の正式の發表は二月八日であつた。其の御芽出度は先生の御喜びのみならず親しく教を受けた同窓の御喜び無き喜びである。そこで先生の御都合を承つた上で、日頃御世話になつて居る在京同窓の有志で祝賀の會を催す事と決めた。丁度蠶種業研究會で地方から上京した同窓も集つた機會にと、二月十七日に新宿の自慢本店に先生を御招きした。其の日集つたのは在京同窓としては原田、松村、大町、坂田、八木、野崎、森山、久保田の八名で之に上田の母校から倉澤氏が來會され、更に蠶種業研究會で上京せられた松野、小川、栗林、白澤の諸氏が加つて賑やかな會であつた。外に先生の親交ある岡本醫師も來るゝ事になつて居たが、都合あつて開會迄には間に合はなかつた。

會は六時半に開かれた。先づ主催者側として自分が簡単に新理學博士勝木先生に御喜びを申し上げた。其の時肩が張られたのか首を左右に動かして居られた。次に先生は座席の儘で失禮すると言はれて次の様な挨拶をせられた。今回自分が學位を貰つたに就いて皆が集つて祝つて呉れる事は自分として誠に嬉しく思ふ。今更學位でも無いが然し一方から考へて見て、學位と言ふものが萬更無意味のもので無いとするならば、貰つて置いてもよいと思ふ。此度の仕事は特に須田、佐藤兩君及び他の人々の勞苦に負ふ所が多いのであつて、其の人々の仕事を代表して自分が貰つたと考へればよいので、(後で考へれば此時から何んとなしく御顔の色が悪かつた様に思はれる)之に依つて今迄骨折つて呉れた人々の苦勞も無駄で無かつたと言ふ事が明かになつた譯で、自分としても其の點甚だうれしく思ふ。今晩は諸君の好意に甘へて充分頂戴する。先生の挨拶が済んで一同座を崩して酒宴に入るからぬ内に、先生は無言の儘

立つて室を出て行かれた。多分手洗場に行かれたらう位に一同考へて居たが、御歸りが遅いので自分が行つて見ると、次の休憩室で横に休んで居られて、『一寸頭痛の氣分だから少し休んで行く。少し肩が張る』と言はれて居た。其の内次の間の者が二、三人御様子伺ひに行つて、冷水で頭を冷やし肩を擦つたりして上げてゐる内、先生は『大分心持が宜くなつたから皆宴席に戻つて呉れ自分も間もなく列席するから』と元氣よく話された。(後から思へば此時或は先生は折角の會を白けさせてはとの御考へかとも考へられる)其の内に岡本君が會に來る譯だから岡本君を呼んで呉れと言はれたので、直ちに電話で先生の御氣分の悪い事を御知らせして同氏に來て貰つた。同氏が診察の結果先生は心臓が大分弱つてゐる様子だから其の手當をしたが此處では充分の手當を致し難いので自分の病院に御連れした方がよいと思ふから御家族に來て戴いて相談申上げて呉れとの岡本氏の注意があり、野崎氏が直ちに御宅に奥様の御迎ひに出かけた。其の後で間もなく話をして居られた先生が急に両手を後に動かして、固く拳を握られると共に人事不省に陥られた。そこで大騒ぎとなり、更に附近の伊藤醫師の來診を求め、岡本氏と立合診察の結果、腦溢血症と診察された。餘程重篤な様子として、直ちに平塚場長其の他御親戚、知友の方々に電話を以つて御知らせした。間もなく奥様、御令息、御令嬢及び平塚場長が來られたが其の時は先生は全く昏睡状態に陥られて居た。家族の方々と御相談の結果、充分の手當の行き届く様に近くの岡本病院に静かに御移しする事にして寢室で病院に御移したのは九時頃であつた。

先生の病變を聞かれて農學部の宗、鈴木兩教授及び試験場の大澤(一衛)技師が間もなく馳付けられた。病院に移つてもなく電話によつて横濱病院長の須藤博士(御主人)及び須藤博士の知人の竹内

醫學士が來診されたが何れも重い腦溢血と診察された。斯くして兩醫師とも相談せられ岡本醫師は看護婦二人を指圖して、瀉血、注射、洗腸、其他あらゆる方法によつて寸時も早く意識を取戻さるゝ様にと御手當した。奥様、御令息、御令嬢は元より御親戚の須藤令夫人、山田さん、龍田さん御兄弟が枕頭に御看護申上げ、同窓としては交代に御付添ひ致す事とし、此夜は松村、大町、八木、野崎の四名が枕頭に座した。斯くして徹夜御手當申上げたのであるが、容態は刻一刻悪化して翌朝明方頃には全く絶望状態に陥られたので、午前七時二十分御危篤の儘橋場の御自宅に御移して御看護申上げたが更に其効なく、遂に周囲の人々の限り無き獻儀の中に見られつゝ、永遠の安き眠りに就かれたのであつた。先生の唯一人の御令弟常雄(電報通信社調査課長)には折悪しく北海道に御出張にて先生の御病床に間に合はず翌日の十九日朝急報により漸く御歸京なされたが、時既に遅く先生と死の對面をせられた事は、誠に御氣毒に堪へなかつた。先生御危篤の趣天機に達し生前の功績を嘉せられ位一級を進められ正四位に叙せられ農林技術士として高等官二等に叙せられた。告別式は二十一日午後一時より自宅に於て肅かに行はれた。

蠶業試験場の方々に始め在東京地方の仲間五百餘名、弔辭、弔電約三百通、供花二十餘點、午後二時式は終り、御遺骸は同時直ちに茶毘に附し、御遺骨は初七日の二十四日、御兩親の永眠せらるゝ谷中の勝木家の墓地に埋められた。御戒名釋喜覺大士、御年五十六。世界的偉大なる蠶學者(生物學者)として我々畏敬の恩師として、我母校並同窓生に對する終始變らざる同情者としての先生と突如別れた事は、誠に痛惜の極みである。されど死生命なり、人力の如何とも致し難きを恨むのみ。我々は先生より受けたる厚き御薫陶の萬一に報いん爲め、互に自重自愛、奮勵事に當るの覺悟を堅むるの要を一入痛感する次第である。

勝木博士の急逝を悼む

社 峯

勝木先生が亡くなられた、といつても今日未だ嘘のやうな氣がしてならない。私は御臨終のみとりをし又埋葬式に送列してゐるがこれが夢のやうに思へてならないのである。勝木先生は母校創立から學校の爲めに又蠶絲學界の爲に、多難な我が國蠶絲業に奮闘時代に努力貢獻された方で、その御功績は今更喋々を要しない。學校で教へを受けた一回から七回までの卒業生は勿論のこと先生が國の蠶業試験場に轉じられてからも尚も蠶學に關係ある同窓の先生に教へを受け又御世話にならぬものとはない筈、先生の御長逝は學界のためにも餘りあることである。

先生は農學博士である、外に最近また理學博士の學位を齎された。『今更若い者に在して學位請求でないが學問に減な仕事をしてゐる者への刺戟にもと思つて』獲られたさうだけれど、仲々常人の眞似の出来ない事である。先生が腦溢血で斃れたのはそのお祝ひの席であり先生の御喜びを心から我が事のやうに喜んで教へ子達の集ひの席であつた。主催者の挨拶に次いで先生の御答辭があり、益々一二杯召上られた頃別室に退かれたのである。初めは幹事二三人が知つてゐたきりであつたがその内に御容態がよくないといふ事を知りやうになつた。當日の會には昔上田の校醫であつた岡本ドクトルも參加の豫定であつたが、運參の爲め先生の御病氣といふ事で歸附した。ドクトルの來た時は未だ先生自身容態に於いて話をして居られたのであるが間もなく肩を揉み續けてゐたY君の手を止めさせ御自身頭へ手をやられたと思ふ刹那腦出血の症状に急變された。岡本ドクトルは先生の信厚厚かりし名醫であつて先生の御最後を診られたのも因縁であり又先生も御満足の事と思ふ。只御家族が先生御正氣の中に間に合はなかつたのは返すも御氣の毒であつた。先生は生理學遺傳學等の専門方面以外に多方面に渉る博識であられ殊に蠶絲業に就いては製絲機械方面迄一貫した常識を持たれたその方面の専門家でも迂闊な事を言ふと細かい處を追及されたものであつた。そして常に『蠶業家は生絲の原料

を作り製絲家は編織物の原料を作るのだから、その用途を知つて仕事をせねば一歩宛遅れていつも下積に甘んじなければならぬ』と言はれ、蠶絲業の將來進むべき方途を指摘して居られた事は私も常に感銘してゐた點である。先生の頭腦明晰は言はずも明白、そのために我等凡人の言行は先生から見たら殆ど馬鹿に見えたかも知れない。それ故にや隨分猛烈な叱言を食つた人達も少くない。所謂俗にいふ雷親父であつたかも知れない。が然し教へを乞ふものにはどこ迄も面倒を見て呉れる。ナマジ誤魔化さうとすればどこ迄も追及するてふ態度その追及叱咤がまた甚だ熱心猛烈なので氣の小さい者は先生を怖れ又先生を離るものさへあつたやうである。先生は北莊と號して書をよまれた。又柔劍道は昔とつた杵柄でよく講釋されたものであるが、上田時代の武勇傳も仲々数多い事古い同窓の中には随分先生のそうした逸話を御存じの方も多しと思ふ。上田の學校が創立された當初、今の様な美事な桑園はなく一部は水田で一部は石ころだらけの荒地であつた。それを先生は率先して生徒に交り草鞋脚穿て天地返しをされた。そうした有様を針線校長の形辭の中にも聞いた我々は涙を新たにして泣かざるを得なかつたのである。御家族の方々に於ては層一層思ひ出して強く感じられた事であつたらう。御子さんは二人、男の方は中學を出られ上級校の受験準備中での異常なショックを受けられたのは誠に御氣の毒である。下の娘さんは高女二年御在學中で御傷心の様は見るに耐えぬ事である。先生としては御得意の絶頂、御喜びの只中に急逝されたわけでも最も信頼する岡本ドクトルに手を取られ多くの教へ子達に圍まれて息を引き取られたのであつて些の苦痛もなき大往生であつた。只返すも御氣の毒なのは御遺族の皆様である。御墓所は東京市谷中墓地で省線日暮里驛を上に出た間近である。あまりの御急逝に信疑さへも怪しむ同窓諸君への御報らせを兼ね、先生の御冥福を祈る次第である。(一一、二、二四一七忌の日)



亡き高森君の思出

松澤 榮

冬彦(寺田寅彦氏)の蒸發皿の中にこんな事が書いてあった。猫が用便する時は先づ適當と思ふところに穴を掘って丁度よい加減の深きになつた時に自分の體を當てがひ行ふ。然し若しその穴が適當でない時は二、三步前に進んで同じ様な穴を掘り直しそれに當てがひつゝある。それでも尙氣が修まらぬ時は更に二、三步前に進んで穴を掘りその具合をみる。結局自分が満足する迄はこれを繰り返す。猫は自分の當てがひ方が悪いのでなくみんな穴が悪いからだと思つてゐるらしい。多くの人の中には或はこの猫の類がないとも限らぬ。

高森君が若し達者で無事に紡織といふ様な學問を修められてゐたならば或は吾々と同じ様に寺田さんの其の猫に似た類になつてゐたかもしれない。一月十二日頃だつたと思ふ。柏原の鈴木力君から高森君の亡くなられた通知が來てゐた。丁度十日から出張してゐたのでその通知を見たのはそれから二週間も後になつてしまつた。故人に對しても鈴木君に對しても甚だ相濟まぬ事をしたと思つてゐる。

したと思つた。心では吃度色々な事を想像したに相違ない。

一昨年の暮學校に寄つた時に開いたら結局修業のまゝ郷里に歸つたが又非常に悪いといふ話であつた。岡山の犬森君にでも聞いたら今少しその経過が知られるかもしれない。暑中見舞や年賀状を出しても餘り返事がなかつた様に思ふ。然し別段失禮な奴だとも思はなかつた。學校に行くときは、歸るとき、又夜街で會つた時などソツツナイ、オーとかヤアとかいつた様な挨拶をよく受けた。夏の暑い晩などアラ、三、八の夜市を歩いてゐると岡野の菓子屋からマツといふ様な親しい勢のある言葉でよび止められた事がよくあつた。その時は大概無帽であつたが、靴だけは流行型の立派なやつを履いてゐた。學校に行くときは吃度靴若くは草履で、決して下駄を履かなかつた様に思ふ。袖のとれ相洋服でも、裾のボロ／＼になつた長いズボンでも、ナツバ服の時でも何んとも判に見えた。鴛鴦が片羽を振つた様な頭髪をしてゐる時でも少しも不自然でなく、リダーでパツパツをやつた時でも假裝行列で乞食になつた時でも全く道に入つた姿であつた。若し個性を生かして此方面に努力したら或は後年文化勳章でも貰つたかもしれない。

以前には運動部は松高、桐生高工、東京高工の三つの試合があつた様だが吾々の入學した當時には桐生とも紛争して各々が試合するものは東京高工一つであつた。野球部は殆んど松高一つで甚だ貧弱であつたらしい。三年の時高森君がキヤプテンでカンチヤンや熊谷君等をみんな双葉に合宿させ殆んど毎日、眞暗くならぬ迄張り、例年にならぬ強チームを組織して各學校と試合した。長岡高工との試合は一回は負けしたが後では一八對三位で大勝した様に記憶してゐる。撞球なら學校の附近でも、街でも殆んど負けなかつた。勝つてやらなければ納まらなかつた。高森君の性格はこんな所にもうかゞはれる。

クラスメートとしては丁度一年半位であつたかと思ふ。病氣のため休學されて二年の時吾々のクラスに入られた。それから三年の秋には助腹で又休んで療養されてゐた。双葉から上野病院に入院した時は「もう駄目だらう、例へ回復されても二度と學校には出られないだらう」と皆んな想つてゐた。それが三月の卒業式頃には殆んど全快されて東京の兄の家に靜養されてゐた。何んだか高森君に限つて特別直りが早かつた様に感じた。八月中旬徴兵検査のため歸郷する途中學校に寄つたら高森君が松尾町通りから一寸入つた富士屋別館に來てゐることを聞いて尋ねてみた。その時は非常に元氣で、元の體にすつきり直つた様に見えたが、まだ時々熱が出るから注意してゐるとの事であつた。なるべく會社の話などせぬ様に注意してゐたが、茶碗を持つ時に僕の油じみた顔だらけの指や手を見つけて、「そんな事をどの位續けるのだ」と嫌な顔付をして聞かれたが、かくすにもかくされず「つい六ヶ月位だらう」と云つて胡麗化しておいた。が何んだか氣の毒な事を

京行進曲、道頓堀行進曲等の流行歌や優しい關谷敏子の子守歌などを得意で歌つたり、又あの邊の子供の相手になつて傳次郎や寛壽郎の劇演を演じたりして喜ばせてゐた。軟からい様でも存外硬かつた様に思ふ。男からいふ女からもよく好かれた。エピソードも數々あつたらしい。

惜しい人は短命といふが、ほんとに高森君は惜しい人であつた様に思ふ。不幸にして病魔に犯され他界せられたとは言へ、あの時分その儘で東京か大阪邊に元氣な生活をしてゐる様に想はれてならない。(二月十二日記)

元小縣蠶業學校校長清水冽氏

御遺族其他よりの禮狀

亡父洌君に際しては御重なる御弔電を辱うし御芳情の段厚く御禮申上候、先是以書中御禮申上度如斯御座候 敬具  
昭和十二年一月  
男 清水 洌

千曲會御中

肅啓、故清水洌氏葬儀に際しては御多用中にも不拘御弔電御弔御香資御供物を賜り感有奉深謝候、早速拜禮御禮申上本意の處不取敢以書中御禮申上度如斯御座候  
昭和十二年一月三十一日  
愛知縣立青年學校教員養成所  
愛知縣立農業青年學校  
千曲會御中

故勝木喜童先生

御遺族よりの禮狀

勝木喜童葬儀之際は遠路馳々御弔問被成下且御御重なる御供物賜り御芳情誠に難有奉深謝候、先は不取敢御禮申上度如斯御座候  
昭和十二年二月二十一日  
男 勝木 辰 男  
外 親戚 一同  
千曲會御中

千曲會御中

弔慰金報告

故井出滿三氏弔慰金第四回  
金貳圓也  
金壹圓也  
右合計金參圓也  
累計金貳拾七圓也  
後藤 幸一  
鹽原 克巳

會員動靜 (三月六日)

- 北村俊一(現職) (勤)本校教務課(住)上田市仲町二四九
- 松田明美(現職) (勤)本校圖書課(住)上田市海野町四七二
- 西澤喜美(現職) (勤)本校庶務課(住)上田市外神科村大字吉里二二二五
- 柴田 尚(現職) (勤)本校物理學教室(住)上田市日出町二五二
- 三好 圭一(職) (勤)佐賀縣伊萬里町西松浦郡々農會内、西松浦郡養蠶業組合(住)伊萬里町幸善町
- 安仲 勳(職) (勤)中津市、鐘紡製絲部大分支部築上駐在
- 坂口正信(職) (勤)從前通(住)栃木縣下都賀郡那珂村
- 若林爲夫(職) (勤)從前通(住)東京都府中區練馬郡東本町信用組合裏
- 香掛久雄(職) (勤)從前通(住)東京都府中區並區和田本町九五三
- 顯富正廣(職) (勤)中津市島田町、鐘紡中津工場製絲部(住)中津市南堀川町三一六
- 鈴木正二郎(職) (勤)從前通(住)靜岡新富町六ノ五
- 坂口育三(職) (勤)東京市杉並區高圓寺、農林省蠶絲試驗場
- 山内一(職) (勤)從前通(住)靜岡市柳町四二
- 久保田不二男(職) (勤)靜岡市田町、靜岡縣蠶業取締所靜岡支所(住)靜岡市西草深町、吉見義資方
- 伊藤 清(職) (勤)從前通(住)横濱市中區打越町三〇
- 味澤泰造(職) (勤)高知縣長岡郡大窪村、蠶絲販賣組合聯合會
- 清水逸五郎(職) (勤)横濱市中區本町五丁目日本町ビル、横濱シルク株式會社
- 電話本局代表四〇三一番
- 德江市郎(職) (勤)東京市芝區濱松町一ノ四小木ビルサング三階德江商事
- 佐野忠二郎(職) (勤)從前通(住)神戸市登呂區野崎通六ノ三三
- 加本芳文(職) (勤)從前通(住)滿洲國哈爾濱南崗大直街三〇ノ二
- 林 清(職) (勤)從前通(住)熊谷市筑波町七〇一
- 依田 實(職) (勤)福井縣栗田郡、福井縣生絲檢査所栗田部支所
- 橋本 實(職) (勤)横濱市中區北仲通、横濱生絲檢査所
- 牛草榮喜(職) (勤)奈良縣櫻井驛北、龜山製絲大和工場
- 末次房一(職) (勤)從前通(住)海田市名高三四四
- 木山新一(職) (勤)從前通(住)大東紡織株式會社(住)名古屋市外守山町守山七七八(社名改稱)
- 藤松利八(職) (勤)名古屋市中區織部町一、大東紡織株式會社(住)名古屋松尾ふさ(職) 退會
- 熊會和子(職) 退會
- 瀧谷まさ法(職) 退會
- 市川乙女(職) 退會
- 金井たかえ(職) (勤)ナシ(住)上田市中常田七四二
- 小柳しづ(職) (勤)本校ヲ退職ス
- 五井光子(職) (勤)岡山縣英山郡江見町、片倉江見製絲所(勤務先改稱、二月號訂正)
- 藤田志津子(職) (勤)奈良縣櫻井町驛北、龜山製絲大和工場(住)勤務先ニ同

お願ひ

左記會員の住所御存知の方は御通知下さる様御願ひ致します。  
井谷信一(職) 淺井春雄(職) 八本 喬(職) 吉野利一(職) 高柳春雄(職) 鳥湯暢三(職) 足立勝彦(職) 叶世高義(職) 清水 巖(職) 内山嘉高(職) 河野 春(職) 深山銀作(職) 小林敏子(職) 藤井宗雄(職)

支會通信

東海千曲會總會

昨年の總會に於て次回を西三河に開催する事に決議、西尾の吉野、山口兩氏に開催地其他の件を御願ひした結果、以上兩氏に加ふるに刈谷の高野、杉浦、小垣江の平野の名「コンビ」で刈谷町、大喜館と決定、去る十一月十五日舉行。午後一時半の定刻に集まる者二十餘名。直に自動車運搬一ト大裝束だが一對歐無線電信局依佐美送信所へ。あの汽車の窓から望まれる日本一の高塔八本、近寄つて見ると愈々大きい。高さ二五〇米と聞き今更乍らもう一度見上げる。こいつが鋭くけづいた鉛筆の先きで立つて居る様な格好だから驚く。どんな無風の日でも頂上では何米とか揺れて居るそう。これら建設の話、アンテナの説明、遠くロンドンへ電波の飛ぶ有様、運轉中の機械の説明等に今更感激の目を見張る。此處を辭して現代日本工業の花豊田織機自動車工場見學、敷地五〇町歩、職工三千將來益々擴張計畫中と聞く。技師殿の説明の後一通り素通りするさへ疲れる。あの赤錆た鐵の山からあの精巧な機械、スマートな乗用車、頑丈なトラックの出来上る迄の順序を見學し一同現代科學文明の偉大なる姿に接するを得此上なき満足。時間の關係もあり四時半會場へ歸着、直ちに總會開催、地元高野幹事の挨拶あり稲石君を議長に推す。名座長鮮かに擧げ、十分位にて終り直ちに懇親會に移る。以下三時間餘は書くだけ野暮斯くして八時半解散。終りに地元諸君の絶大なる御盡力を謝す。特に杉浦君の御尊父を煩はし縦覽謝絶の豊田工場の戸を開かしたるは全く多とする處である。尙當日の決議事項を拾へば次の如し。

御願ひする事に決す。一、次回總會の件 三月より名古屋に開催の汎太平洋博覽會々期中に於て名古屋にて開催。當日の出席者氏名(るは順) 稲石 佐一 稲垣文一郎 乾 正 今村 良郷 大久保秀治郎 豊治郎 及部 蝶作 吉野 健吉 高野 耐三 田中 齊 山口 貞周 松井 清三 兒玉 慶次 向坂 朋二 青木 保 天野 末治 齋藤 三 荒雄 平野 秀男 杉浦 卓三 鈴木 康之 鈴木 泰一 (以上二十二名) 筆者合情當日缺席止むを得ず望遠鏡により寫つた所を左に記す。 ○稲石佐一君(蠶三) 作手農林學校校長高等官三等といかめしい肩書を持つ人、愛知縣の高原に十年鎮座敏腕の程は今更申上ぐる迄もなし。子供さんの無かつた處數年前郷里の親戚より男子一尋常小學五年位一を得幸福其物、現在にても其子供相手に相撲をとる元氣あり。 ○稲垣文一郎君(蠶三) 新進氣鋭豊橋の製絲試驗場にて活躍中 ○乾正君(紡一三) 今は時めく日本レーヨン岡崎工場勤務、擴張に次ぐに擴張と云ふ工場的發展振り君も腕の奮ひ甲斐陽々たるものあり。 ○今村良郷君(蠶一三) 道鏡とも稱す。愛知縣蠶業試驗場岩津支場の桑園の親方、聲の大なると赫ら顔の所有者、童顔の士、最近官は判任にして身は双入とな。岩津天神にて華燭の典を擧げ寮中何もの、努力、令聞は女學校の先生。 ○大久保秀治郎君(蠶六) 豊橋市に群在する製絲場中にて斷然頭角を抜く大星館の若主人と申しても餘不惑と云ふ處、此頃的好景氣に嬉しい多忙振りを見せて居る。體は益々肥り割合に聲の小さい人、昔の小山君。 ○岡豊次郎君(紡五) 總會としては新顔に屬す。されど秀げたる處は正にピカ一毛織物王國愛知縣の毛織物検査所の重鎮同所内同窓十數名より成る「みすゞ會」のキャプテン。

○及部蝶作君(大正六年養蠶科中途退學) 愛知縣農林技手として郡駐在より抜かれて縣廳入りをした程の人、此の男大男なり。 ○吉野健吉君(蠶四) 西尾蠶絲學校に山口君と共に創立當時よりの古武者、生徒間の受も到つてよろしい。全く西尾人になり切つて居る。碁を打つか並べるか知らぬが相當なものらしい。生れる子供が女子女火に頑張つて五人目六人目は見ん事男、當支會にては工藤君と共に子福者の兩横綱。 ○高野耐三君(大正三年養蠶科中途退學) 當時の方々にはハハアン野球の高野かと御合點の事と思ふ。其後二ヶ年程伊佛に遊びアチラの蠶種業を体験し今は父君の後を受けての蠶種製造家。 ○田中齊君(蠶二) 實飯郡の實家で製絲場經營、健實なる工場として知られて居る。 ○山口貞周君(蠶六) 吉野君と共に西尾蠶絲學校にあり、同校製絲主任、一方野球部を擧げての活躍、豊川、鳴海の球場より近き將來の甲子園を目指して。 ○松井清三君(蠶一) 神戸生絲矢作製絲所の御大頭髪薄らぎしも仲々の元氣。 ○兒玉慶次君(蠶八) 卒業後未だ人相入りをする人の少なかつた當時よりの人相育ち、昨年から日本レーヨン岡崎工場に入り一方の旗頭、体は頑丈だが作る絲は細いよと例のカスレタ聲。 ○向坂朋二君(蠶一八) 尾張の蠶種家を辭し豊橋へ歸り何でも年賀状によると生命保險の支店長とやらに轉身とか。毎年の總會に出席意氣天を衝く痛快男兒振りを見せて居る。縣會を経て日比谷に獅子吼の日を期待す。 ○青木保君(蠶二) 岩津の試驗場にて研究に餘念なし。若手のチャキ。 ○天野末治君(蠶九) 舊姓柴田 京都帝大出の經濟學士、辯護士として名あり。今は岩津から名古屋の法律事務所へ通勤 ○齋藤合君(蠶七) 舍はトネリと讀む。

新城農蠶學校に卒業後直ちに飛び込み十七年、各種の發明に興味を持ち今迄に數種の特許を獲て居る。中でも電氣備器は各地の試験場學校等へ出て居るから御馴染の事と思ふ。 ○芝荒雄君(蠶三) 稲石君と同期、子供のない點も同じ。但し此方は女の子を他より得て居る。千枝氏と共に毎年の千曲時報を賑はして居る人。昨夏滿洲旅行をやり土産話に花が咲く。愛知縣の桑園主任技師。 ○平野秀男君(蠶一五) 蠶種製造家の若旦那、養蠶期ともなればオートバイをアソ飛ばし一日數十里を馳せ廻ると云ふ活動物家、蠶種の方が日暇になれば鶏の卵卵事業で又活躍、但し自分自身の卵卵作業

新京より

二月十七日新京に於て湯川秀夫、濱香三、池田正五郎、垣内源一、出野正雄、鳥羽誠の六氏會合し校長、千曲會及理事者宛に左の三通の寄せ書を送附す。製版するも判讀し得ざると思ひ書抜きて左に記す。名前と文句との入違ひあるかも計られず。御許しを乞ふ。(編輯子より) 一、零下二十度積雪の路札み候。昨年御來遊當時を偲びつゝ御健康を祈上候。 湯川 一、湯川、池田、垣内、鳥羽、出野及野生新東京に會し例に依り先生の御健康を祈り申候。御陰を以て當千曲會も一日一日と盛大に相成申候御安心下され度候。堤兄の仕事も多事目下晝夜操業中に御座候。去年の今頃先生は新京でした會員も一日と増します。今日は愉快です。餘白がありましたので。 濱香三 一、新しい顔を描へて一同元氣。 蕉 一、湯川、池田兩先輩を迎へ更に新人絲十九回鳥羽君を加へ一同元氣益々、他は先輩の言によりよろしく。 垣内 一、馬の背に霜柱が立ち牛の海がづらに化ける海に向ふで、今宵は幹事になつて大いに男を上げてゐます。栗栖超 一、只廣漠! (以上校長宛) 一、會議で東京、六名の會員が會合して

は? ○杉浦卓三君(蠶二〇) 高野平野兩氏と共に今回の總會には大變御厄介になつた方、これ又蠶種家の若旦那、結局本年度の總會は同地方蠶種家主催と云つた處。 ○鈴木康之君(蠶二) 齋藤君より一年程遅れて新城農蠶學校へ入り製絲主任、學生時代に少しも變らぬ若々しさと元氣を持つて居る。蠶絲副業に力を入れネタヤイや帯などを作り出し地方の評判到つてよろしい。 ○鈴木泰一君(蠶一三) 最近長野縣より歸つて来た人、本縣でも最も養蠶業の盛んな丹羽郡に勤務、縦横に腕を奮はむすの意氣滿滿、前記齋藤、鈴木兩君とは師弟の間柄にある。(目玉記)

おます。皆沖天の意氣でやつておます祈御健康。 湯川 一、蒲生、倉澤兩先生御壯健を祝します今日當地に於て會員六名會し母校當局者に不平たらへです。一層當地の理解を願ひます。一度来て下さい。 濱香三 一、今夕は元氣なの許り集つておます。此の上の愉快はありません。 蕉 一、御覽の如く新京益々盛大、本夕殊の外、同窓一人二月より加はる。元氣益々、御大事に。 垣内 一、小便が忽ちにして凍りステッキになるといふ酷寒の大陸で新京千曲會幹事になつて大いに男をあげてゐます。泥を吐けば幹事は自稱。遙かに御健康を祈ります。ヨキ便あればこのステッキを送ります。 栗栖超 (以上理事宛) 一、滿洲に来ると皆心臓が強くなります。 湯川 一、今回新京で會員六名會す。内地の皆様御壯健を祈ると共に何んだが物足らざるを…… 香三 一、雪はさらさら積るでも無し。飲んだし溶けて流れて酒となる。コンマ以下でも酒は凍らぬ。御神酒上らぬ神はない。 垣内 一、興安嶺から小便すれば流れへて地中海。滿洲は廣いです。 栗栖超 一、一回美坂の酌にメートルを擧げてゐます。(以上千曲會宛)

編輯室より

△二月號第二面所載荒木氏の「農林省便り」中に左の如き多数の誤植あるを同氏より御注意に接し餘りに編輯子の校正頭腦のルーズなるに自ら驚いた。此處に深甚なる御詫びを申し上げると共に今後校正に一段の深甚なる注意を拂ふ事を誓ふ次第である。

行 誤

- 二六 八 原原種管理法 原原種蠶理法
- 三 一九 (國蠶日二二號) (國蠶日二二號)
- 三 三二 (國蠶支二六號) (國蠶支二六號)
- 三 三二 第二部 第八部
- 四 七 七 仕上法 仕立法
- 五 二 七 七 託 託

△四月號から愈々冊子とする事を約束したが此處に不可能になつた事をお詫びせねばならぬ。物價騰貴の波は本紙に迄押寄せて印刷代、紙代の値上げとなり折角冊子にする爲めに増加して貰つた豫算は悉く値上げの部分に喰はれてしまつた。それで甚だ残念であるが従來迄の型で繼續せねばならぬ羽目となつた。此の點何卒御諒承願ひ度い。

△勝木先生が突如逝去された。我々同窓生にとつても蠶絲業界に於ても非常なる打撃である。此處に謹んで哀悼の意を表する次第である。

△松澤榮氏の『亡き高森君の思出』の原稿はレターペーパー様のものに書いてあつたので行數を數へるのに困難した。今後必ず原稿紙へ十八字詰に書かれたい。然して高森氏は中途退學者にしてその弔慰文の如きものが果して本紙に掲載の資格ありや否やは疑問に思はれたが廣義に解釋し敢へて登載した。

△前月に引續き石倉先生から玉稿を賜つた。誠に感謝の外は無い。將に新卒業生が社會に出でんとするの機に斯くの如き座右の銘を賜つた事は新卒業生に如何許りの効果を齎すか譯らない。のみならず會員諸氏にとつても一讀万金の價がある。

△今年の冬は氣味の悪い程暖かであつた。こんな事で冬が済むとは思はれぬので今に本當冬が来る、寒氣が来ると思つてゐた。處がそれも唯心配した次第であつた。迎へてしまつた。そして何處からともなく春のいぶきがひたひたと押寄せて来た。もう斯うなつてはまさか寒さも来まいと云ふものである。

投稿規定

一、内容は不問、平易なる學術研究、會員消息に關する物は特に歡迎。取捨は當方に一任せられたい。編輯の都合に依り全部又は一部を來月廻しとする事がある。

一、原稿は特に豫め申込無き限り返戻致しません。

一、締切は毎月六日限、特に一月號は一日發行とする爲め二十日限とする。

一、原稿は開封し二錢切手(第四種百十瓦)迄を貼布して送附し通信文があつたら別に葉書等にて通知されるが得策である。

一、必ず原稿紙を使用し明瞭にお書き下さい。又文句讀點を必ず施して一字分の間隔を置いて下さい。

一、匿名で掲載希望の場合も編輯部へは姓名をお明し下さい。然らざる時は遺稿乍ら掲載を見合せる場合があります。

一、圖面や寄せ書は一尺八寸×一尺三寸以内とし必ず白紙に墨書して下さい。

一、原稿紙は御請求次第送附す。普通の原稿紙を使用する場合は一行十八文字書込まれ度い。

廣告規定

寸法	期間	一月	六月	一年
一頁		1100	5500	11000
1/2頁		550	2750	5500
1/4頁		275	1375	2750
1/8頁		137	687	1375
1/16頁		68	343	687
1/25頁		34	171	343

但し本會員は七掛とす。

上田市海野町  
河合 器械 舖  
電話 二一七番  
振替長野七八四番

御宴會に御會食に  
レストラン  
香青軒  
明朗な洋室 落付いた  
和室 (數室)  
上田市袋町 電話13番

御來田のお土産は  
みずい餅 上のフルーツ  
杏ゼリ! チョコレット  
晒水筒 黒羊  
信濃そば 果物類 雜貨  
上田市松尾町  
上飯島商店  
電話二六〇・二五四

千曲會指定旅館  
上村ホテル  
上田市海野町  
電話三二七番

千曲會指定旅館  
別所温泉旅館  
花屋ホテル 電話 三一三番  
柏屋別荘 電話 一二三番  
茶代廢止 御宿料二圓

昭和十一年度製造原蠶種  
國蠶日 八號 國蠶日 十九號  
佛純白 佛純白 一號  
國蠶歐 十六號 國蠶支 十六號  
國蠶支 十七號 龍華 仙  
國蠶日 一一號 國蠶支 一〇七號  
國蠶支 一〇六號 浙 江

普通蠶種(春)  
白×國蠶歐 十九號 ×國蠶日 八號  
×浙龍 華 江仙 ×國蠶支 十七號  
黃×國蠶歐 十六號 ×國蠶支 十六號  
×國蠶支 一〇七號

廣島縣御調郡奧村綾目公家  
蠶種業 小川 保  
振替(廣島)二四六番  
振替(大阪)三三三番

種!熊本長野へ

2597 春蠶

富量豐卵

定安作蠶

富量豐繭收

良優質絲

會照御他其績成驗試▷  
◁候上申報速第次

五〇六町江大市本熊  
組 種 製 野 長  
番 八 九 五 話 電  
番 〇 〇 三 二 本 熊 替 振

國蠶日 一一號	國蠶支 一〇七號
國蠶歐 一九號	國蠶支 一〇七號
國蠶日 一九號	國蠶支 一〇七號
國蠶歐 一八號	國蠶支 一〇七號
國蠶歐 一六號	國蠶支 一〇七號
分離白	國蠶支 一〇七號